

平城京右京8条3坊3坪  
発掘調査概報

1993. 3

大和郡山市教育委員会

平城京右京8条3坊3坪  
発掘調査概報

1993. 3

大和郡山市教育委員会

## 例 言

1. 本書は、大和郡山市九条平野町字出口365-1で実施した、発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、谷村馨氏（市内九条町）のアパート建設を契機とし、同氏の委託によって大和郡山市教育委員会が受託事業として実施したものである。なお、調査面積は約200㎡である。
3. 調査期間は、下記の通りである。  
〔試掘調査〕 平成5年2月22日  
〔本調査〕 平成5年3月8日～同3月24日
4. 調査は、下記の組織で実施した。
  - (1) 現地調査  
〔調査員〕 山川均（大和郡山市教育委員会）  
〔補助員〕 武田浩子、佐藤亜聖（奈良大学）、本村充保（同）  
〔作業員〕 堀川正治、米田利男、市井義治、岸田勝信、谷沢喜一、加奥勝、喜多美寿子、米田郁子、杉岡克子、杉岡雪子、藤川ミツエ
  - (2) 事務  
大和郡山市教育委員会  
社会教育課
5. 本書は、下記の分担で作成した。  
〔執筆〕 II章2項は本村、山川、武田の共同執筆、他は山川  
〔製図〕 本村（遺物）、武田、山川  
〔編集〕 山川
6. 調査に際しては、谷村氏の全面的な協力を得たほか、概報作成に関しては植野浩三氏（奈良大学）、今尾文昭氏（奈良県立橿原考古学研究所）、近江俊秀氏（同）、森村健一氏（堺市教育委員会）、大鎌淳正氏（大和郡山市文化財審議委員）より種々の貴重なご教示を得ました。記して感謝致します。

## 本文目次

I	はじめに	1
II	調査の概要	
1.	遺構	
(1)	層序	2
(2)	奈良時代の遺構	2
(3)	中世の遺構	6
2.	遺物	
(1)	奈良時代の遺物	9
(2)	中世の遺物	10
III	まとめ	12

## 図目次

図1	大和郡山市の位置	
図2	調査地点位置図、および周辺の既往調査地	1
図3	検出遺構平面図 (S:1/800)	3~4
図4	SK-35平面図および土層断面図 (S:1/20)	2
図5	SK-21平面図および土層断面図 (S:1/20)	2
図6	SK-36平面図および土層断面図 (S:1/20)	5
図7	SK-39平面図および土層断面図 (S:1/20)	5
図8	P-02平面図および土層断面図 (S:1/20)	6
図9	P-03平面図および土層断面図 (S:1/20)	6
図10	P-04平面図および土層断面図 (S:1/20)	6
図11	SK-06平面図および土層断面図 (S:1/20)	7
図12	SK-05平面図および土層断面図 (S:1/40)	8
図13	SX-01土層断面図 (S:1/40)	8
図14	SK-35、SK-36出土土器実測図 (S:1/4)	9
図15	包含層、SK-21出土土器実測図 (S:1/4)	9
図16	SK-39貯衣壺内出土銭貨拓影 (S:7/10)	10
図17	SK-39出土土器実測図 (S:1/4)	10
図18	SK-05出土土器実測図 (S:1/4)	11

## 図版目次

- 図版 1 1 調査地全景 (西より)  
2 " (東より)
- 図版 2 1 調査風景  
2 SK-35遺物出土状況 (北より)  
3 SK-21半掘状況 (北より)
- 図版 3 1 胞衣壺 (SK-39) 出土状況 (北より)  
2 " (内部)  
3 P-02柱根石検出状況 (西より)
- 図版 4 1 P-03柱根および根石検出状況 (西より)  
2 P-04柱根検出状況 (東より)  
3 SK-06瓦質播鉢出土状況 (南より)
- 図版 5 1 SK-05完掘状況 (東より)  
2 SX-01土層堆積状況 (西より)  
3 " (瓦質播鉢出土状況)
- 図版 6 遺 物
- 図版 7 "
- 図版 8 "

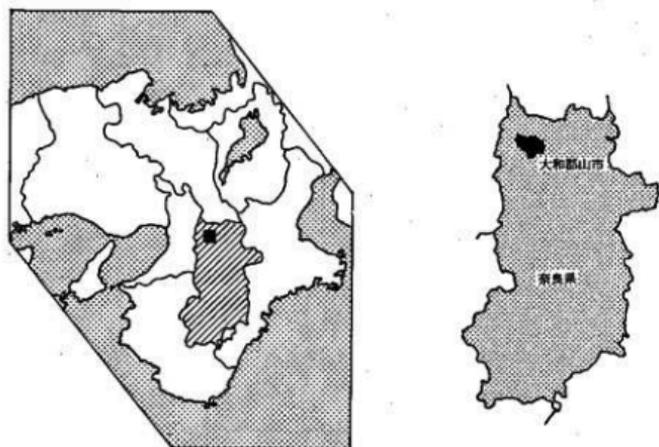


図1 大和郡山市の位置

## I はじめに

今回の発掘調査は民間のアパート建設事業を契機とし、その事前調査として実施されたものである(大和郡山市受託事業)。現地調査は地下遺構有無確認のための試掘調査(平成5年2月22日)を経た後、同年3月8日～24日にかけて実施した。調査面積は約200㎡である。

図2は、今回の調査地およびその周辺図である。同図のうち黒塗部分が既往の調査地であるが、当該地周辺の通有の傾向として、主として低地部分(同図右半)では中～近世に土器、ないしは瓦の製作に関する土取りが活発に行われたようで、いわゆる「土取り穴」が多く検出される。むしろそれ自体、後述のように重要な遺構ではあるが、それによって奈良時代の遺構、つまり平城京関係の遺構が壊滅的な破壊をこうむっていることもまた事実である。ただし従前の調査では、該種の遺構が検出された場合、それ自体を綿密に調査する、ということはあまり行われておらず、それは一種の「攪乱土坑」として処理されることが多かったようにも見受けられる。

ところで、調査地周辺は「西ノ京」と称される地域にあたるが、その西ノ京周辺には鎌倉時代以降、「西京土器座(赤土器座・白土器座)」と呼ばれる、土器の製作に係る座(主として興福寺大乗院門跡)が存在したことで著名な地域である<sup>1)</sup>。つまり、そうした歴史的な条件を勘案すれば、先に記した土取り穴が、そうした土器の製作に係るものと考えerことは十分可能である。この点については後述するが、今回はその当初より、そうした土取り穴が西京土器座と関連するもの、という前提で調査を実施した。

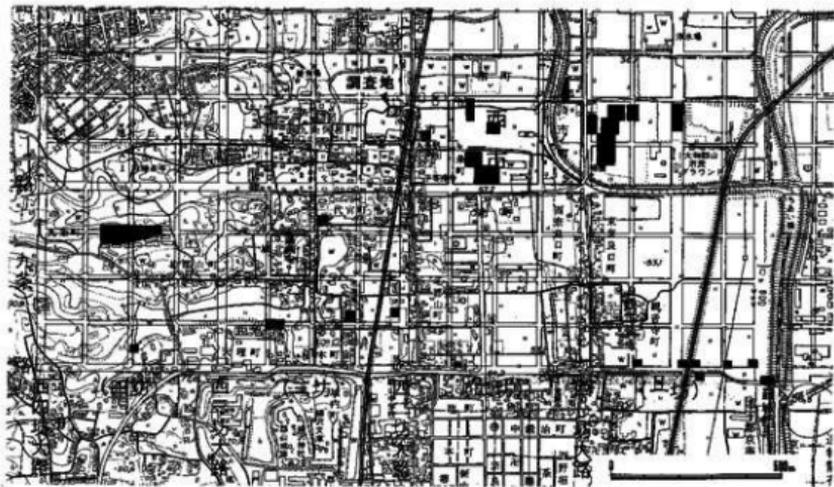


図2 調査地点位置図、および周辺の既往調査地

## II 調査の概要

### 1. 遺構

今回の調査では、奈良時代の遺構、すなわち平城京関連遺構の他に、中世の土取り穴を多く検出した。以下、本項では(1)層序、(2)奈良時代の遺構、(3)中世の遺構の各節毎に記述を行う。なお、遺構の名称については調査時の呼称に従うものとする。

#### (1) 層序

今回の調査地は、地形的には西ノ京丘陵の東縁辺部にあたるため、沖積作用による遺構面の被覆層についてはさほど顕著ではない。そこで観察される土層は、大半は水田耕作等によって生成されたものである。具体的には上面より①現耕土層(灰黄褐10YR4/2、層厚約20cm)、②旧耕土層(灰5Y6/1、層厚約12cm)、④洪水砂層(黄灰2.5Y5/1、層厚約13cm)を経て⑤地山(黄灰2.5Y5/1)に至るものである。

#### (2) 奈良時代の遺構

奈良時代の主な遺構としては柱穴、土坑がある。ただし、今回は調査地全面に広がる土取り穴のため、掘立柱建物のプランを明瞭におさえられるものはない。以下、主要なものについてその概要を記す。

SK-35(図4) 一辺が70~80cm、深さ約16cmの不整形の土坑である。遺構内の堆積土層は灰黄色を呈する砂質土から成る。本遺構より図14-1~5に示すような一群の土器が出土した。時期は、それらの土器より考えて8世紀の中葉とすることができよう。なお、遺構の性格については不明である。

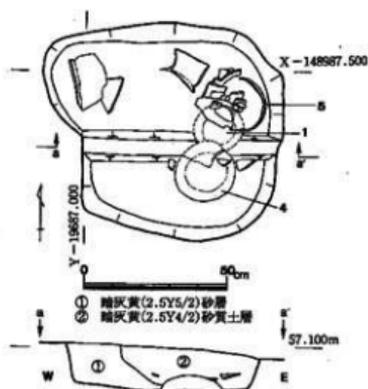


図4 SK-35平面図および土層断面図(S:1/20)



図5 SK-21平面図および土層断面図(S:1/20)

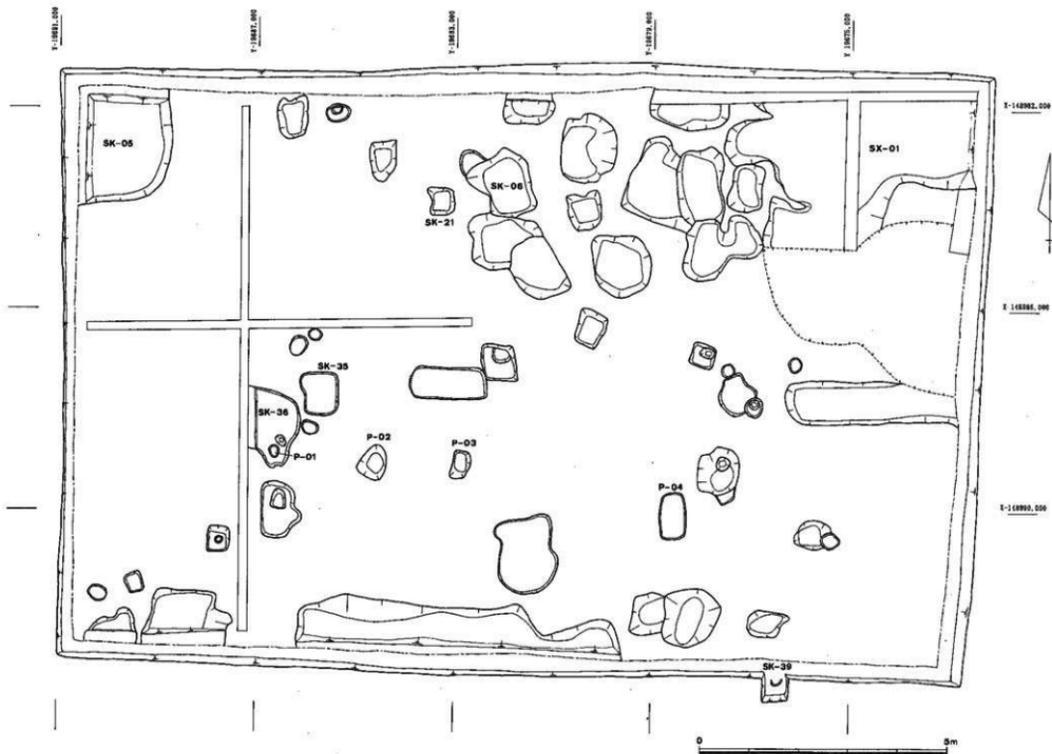


圖3 出土遺構平面圖 (S: 1/800)

SK-21 (図5) 一辺が40cm、深さ約20cmの隅丸方形の土坑である。本遺構に関しては、その形状より推して、柱穴の可能性もある。なお、ここから図15-9に示すような手ずくね成形の土師器高杯が出土した。詳細な時期については、その根拠となる土器が特殊な形態であるため、明確にすることができない。

SK-36 (図6) 径約150cm、深さ約15cmの不整形の土坑である。ここから図14-6に示すような土師器皿が出土した。時期は、8世紀中葉であろう。なお、本図中に示されているP-01については、後述のP-02、03と一連の柱列をなすものである。

SK-39 (図7) 本遺構は、調査区南端の壁面より検出されたもので、直径約23cm、深さ約20cmの小土坑中に、直立した状態の須恵器有蓋壺を据え置いたものである。なお、壺内部より図17、および図版7-11-aに示すような状態で和同開珎が5枚、および炭化した織経質が検出された。以上のように、これについては陶衣壺と考えるのが妥当と思われるが、前述のようにここでは中世の土取り穴等によって奈良時代の遺構の大半が破壊されているため、それが建物等のどの位置に埋置されたものかは明らかではない。時期は、8世紀の中～後葉であろう。

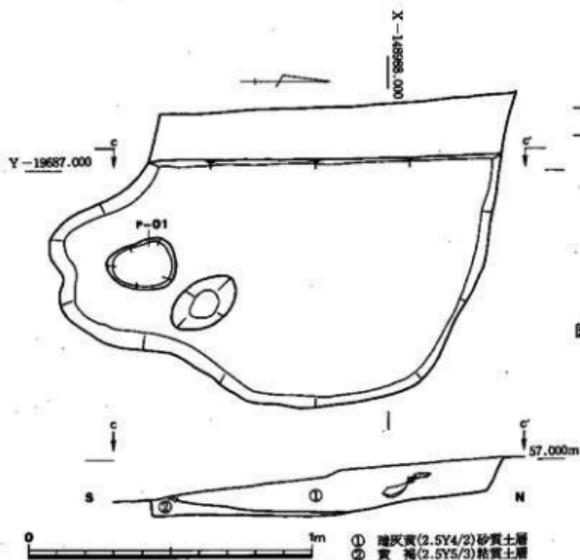


図6 SK-36平面図および土層断面図 (S : 1/20)

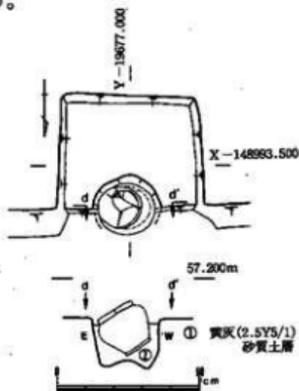


図7 SK-39平面図および土層断面図 (S : 1/20)

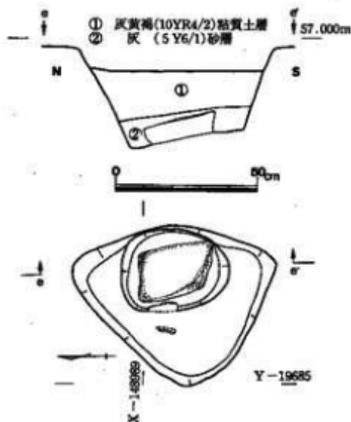


図8 P-02平面図および土層断面図 (S:1/20)

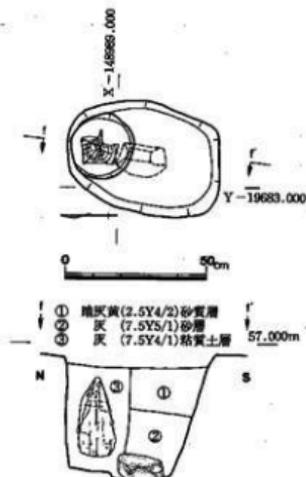


図9 P-03平面図および土層断面図 (S:1/20)

P-02 (図8) 本遺構は、先述のようにP-01、および03とセットで柱列をなすものである。規模は、掘り方(不整形)の径約55cm、深さ約30cmを測る。なお、柱の根石として長辺約25cm、短辺約16cmの凝灰岩(図版3-3)を用いていた。石の上面には焼けた痕跡があり、また調整面を持つことなどから考えて、それはなんらかの構造物の一部を根石として転用したものと考えられよう。

P-03 (図9) 掘り方は長円形を呈し、その長径約55cm、短径約40cm、深さは約45cmを測る。なお、本遺構には柱根(幅約14cm、高さ約28cm)および根石が遺存していたが、根石は柱根の位置とは平面的にややずれたところに据え置かれていた。また、柱穴の規模は直径約23cmを測る。

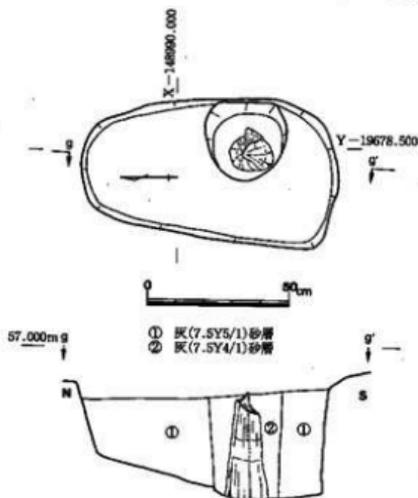


図10 P-04平面図および土層断面図 (S:1/20)

P-04 (図10) 掘り方(長卵形)の長径は約93cm、短径は約50cm、深さは約40cmを測る。また、柱穴の直径は約30cmである。なお、ここでは幅約15cm、高さ約40cmの柱根が遺存していた。ただし、先のP-03等のような根石は存在しない。

### (3) 中世の遺構

今回の調査では先述のように中世の土取り穴と思われる遺構を多く検出したが、ここではそのうちの3例を報告する。

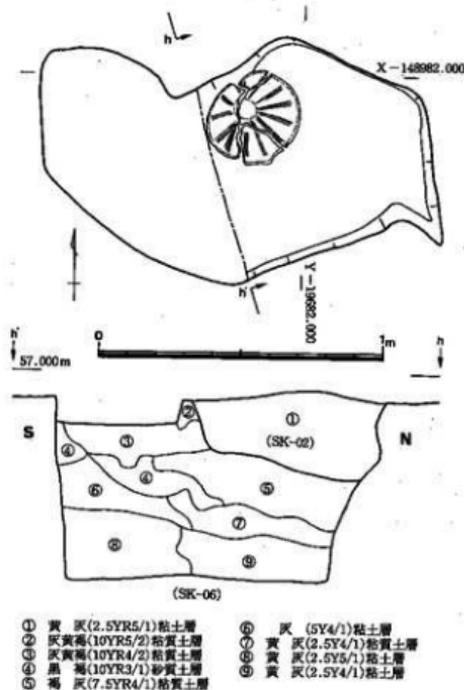


図11 SK-06平面図および土層断面図 (S:1/20)

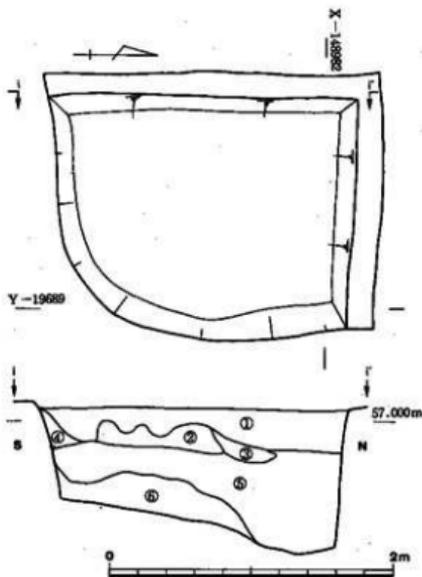
ものを除くと瓦器碗、瓦器皿、土師皿（数量）があり、このうち瓦器碗については近江編年のI-2期（11世紀後葉）のものとしてI-5期（12世紀後葉～13世紀初頭）の2時期におおきく分かれる。したがって本遺構については、土層等によっては明確にはできなかったものの、2時期のものが重複している可能性がある。また、出土した中世土器の大半が瓦器に限られること、また、出土したそれに焼成時のものと思われるゆがみが顕著に認められることから、本遺構は瓦器の胎土採取のためのものと考えたい。この場合、瓦器の焼成窯もまた、本調査区の近辺に存在したものと想定されよう。

**SX-01** (図13) 本遺構は、数基の土取り穴が重複したものであり、したがってその詳細な時期については特定できない。ただし、遺構の最上面より図19-21に示す瓦質播鉢が出土している（出土状況については図版5-3参照）ことから、その下限時期を14世紀後葉～末として捉えることができる。深さは約90cmである。

**SK-06** (図11) 長径約150cm、短径約72cm、深さ約75cmを測る不整形の土坑である。埋土には地山の粘土ブロックを多く含んでおり、この遺構が短期間人為的に埋め戻されたことを示している（この点については他の土取り穴も同様）。なお、本遺構は他の遺構（SK-02）と一部重複している。また、ここより図19-20に示した瓦質播鉢がほぼ完形で出土した。播鉢の内面には使用痕（磨減）が全く見られないことから、これは焼成時に破損した土器をここに投棄したものとして捉えることができよう。つまり、本例はこうした瓦質播鉢の焼成窯が今回の調査地の比較的周辺に存在したことを示している。なお、遺構の時期は、播鉢の型式（近江俊秀分類A型<sup>1)</sup>）より14世紀後葉と考えられる。

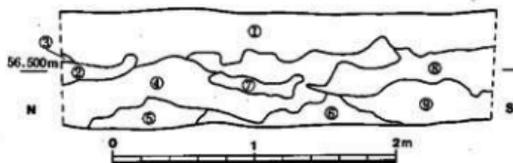
**SK-05** (図12) 本遺構は調査区の北西隅より検出されたもので、全体の形状、規模は不明である。深さは最深度で約10

0cmを測る。出土遺物には、奈良時代の



- |                    |                   |
|--------------------|-------------------|
| ① 黄 灰(2.5Y5/1)粘质土层 | ④ 灰 (7.5Y5/1)粘质土层 |
| ② 灰黄褐(10YR5/2)粘质土层 | ⑤ 灰 (7.5Y4/1)粘土层  |
| ③ 灰 (5Y5/1)粘质土层    | ⑥ 灰 (5Y6/1)砂层     |

图12 SK-05平面图および土层断面图 (S : 1/40)



- |                   |                   |
|-------------------|-------------------|
| ① 灰 (10Y6/1)砂质土层  | ⑤ 灰白(7.5Y8/1)粘土层  |
| ② 灰白(7.5Y8/1)粘质土层 | ⑦ 灰白(5Y8/1)粘土层    |
| ③ 灰 (10Y5/1)粘质土层  | ⑧ 青灰(SBG5/1)粘质砂层  |
| ④ 灰 (10Y6/1)粘质土层  | ⑨ 青灰(10BG5/1)粘质土层 |
| ⑤ 灰 (10Y5/1)粘土层   |                   |

图13 SX-01土层断面图 (S : 1/40)

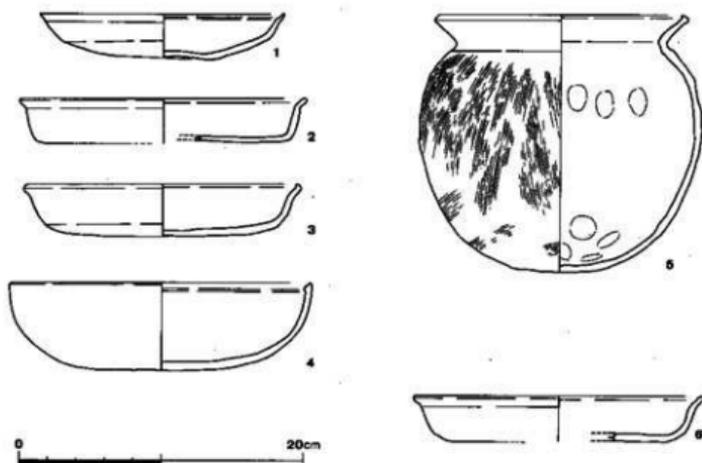


図14 SK-35(1~5)、SK-36(6)出土土器実測図 (S : 1/4)

## 2. 遺物

ここでは今回の調査で出土した遺物を、奈良時代のもの中世のものに大別して報告する。

### (1) 奈良時代の遺物

SK-35およびSK-36出土土器(図14、図版6-1~6) 1は、土師器杯Cである。体部はほぼ直線的に伸び、口縁部はやや外反する。2および3も土師器杯Cである。いずれも底部と体部の境は明瞭な屈曲をなし、外反する口縁部を有する。4は、土師器杯Aである。底部と体部の境は明瞭ではない。5は、土師器甕Aである。体部上半、および同下半の一部の縦位のハケメ調整を施す。体部内面には指頭圧痕を有するほか、同下半にはタタキ調整の当て具痕が見られる。6は、土師器杯Cである。形態的には先の2に類似するものである。

なお、上記の土器の帰属時期については、平城宮VないしはVI期、すなわち8世紀の中〜後葉と  
思われる<sup>4)</sup>。

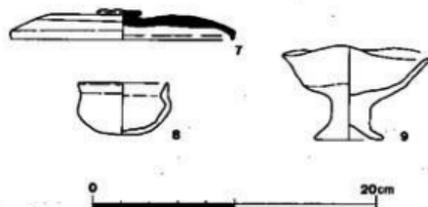


図15 包含層(7、8)、SK-21出土土器実測図 (S : 1/4)

SK-21および包含層出土土器(図15、図版6-7~9) 7は、須恵器杯B蓋である。平城宮V期に相当する。8は、土師器小型壺である。また、SK-21より出土した9(土師器高杯)は、手ずくね成形による特殊な器形を有する資料である。

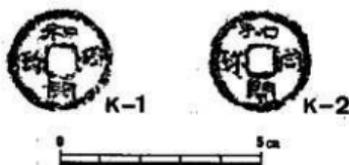


図16 SK-39胎衣壺内出土銭貨拓影 (S : 7/10)

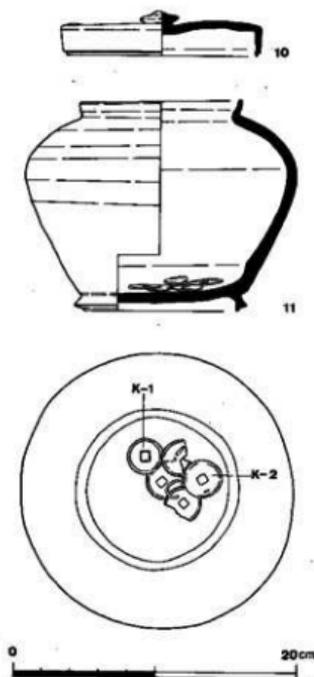


図17 SK-39出土土器実測図 (S : 1/4)

SK-39出土土器 (図17、図版7-10、11) および銭貨 (図16、図版7-K-1、K-2)

・土 器

10は、須恵器壺A蓋である。胎衣壺の蓋として使用されていた。また、11は胎衣壺の本体であり、器種は須恵器壺Bである。

・銭 貨

SK-39胎衣壺中には図16、図版7-11-aに示すように計5枚の銅銭が収められていた。ここではそのうち遺存状況の良い2枚について報告する。K-1、K-2は共に和同開珎である。遺存状況が良くないため、断定はできないが、「開」字の特徴より見て、おそらくはいわゆる「古和銅」と呼ばれるものであろう。直径はいずれも25mmを測る。

なお、大和郡山山市内における胎衣壺の検出例としては平城京右京8条1坊13・14坪における例があるが、ここではいわゆる「新和銅」が5枚収められていた<sup>3)</sup>。

(2) 中世の遺物

SK-05出土土器 (図18、図版8-12~19) SK-05ではここで報告する瓦器の他に、奈良時代の土器や、中世の土師皿 (ごく少量) が出土しているが、本概報ではスペース等の都合によりそれらは捨象することと

する。なお、これは他の中世遺構についても同様である。

12~18は、すべて瓦器碗である。それぞれの所属時期については12~15 (18?) が近江編年のI-2期、16、17が同I-5期にあたり、それらは11世紀後葉と12世紀後葉~13世紀初頭の2時期の

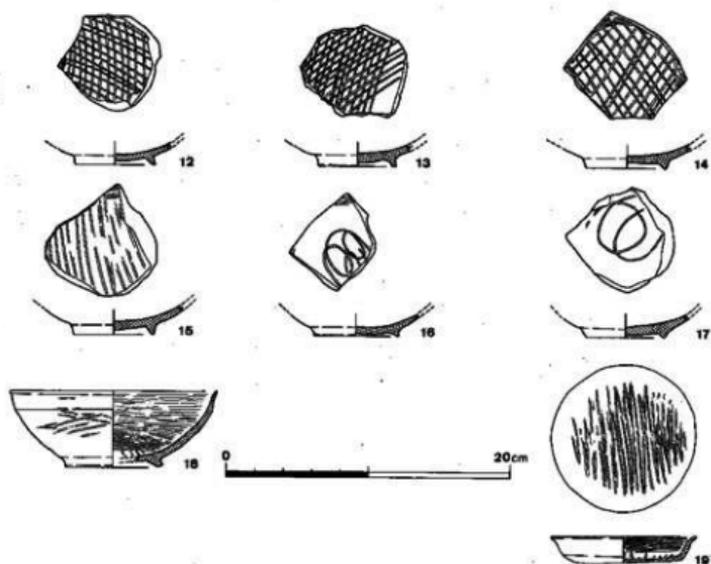


図18 SK-05出土土器実測図 (S : 1/4)

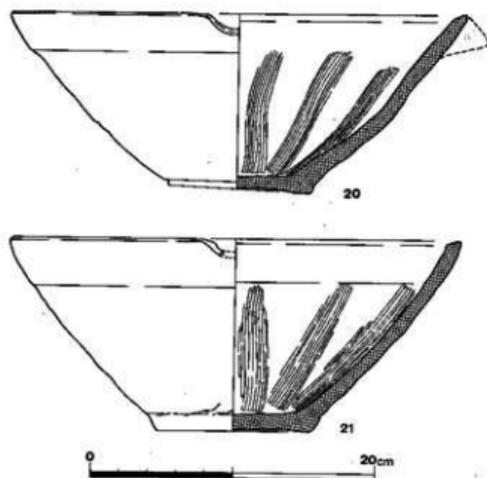


図19 瓦質摺鉢実測図(20=SK-06、21=SX-01)(S : 1/4)

ものにグルーピングが可能である。つまりこのことは、遺構の土層等からは看取されなかったものの、本来このSK-05については2時期の土取り穴が重複していたものである可能性を示している。

SK-06、SX-01出土瓦質摺鉢(図19、図版7-20、21) 20、21は共に土取り穴の上面より出土したものである。いずれも内面に使用痕(磨減)が認められないことから、おそらく焼成時の不良品を土取り穴中に廃棄したものであると思われる。いずれも近江分類A型、もしくはB型(古段階?)に該当する資料であり、その所属時期は14世紀後

葉であろう。大和における瓦質播鉢の比較的初期の形態を知るうえで貴重な資料である。

### III まとめ

以上のように、今回の調査では、奈良時代の遺構として胎衣壺を検出することができた。また、中世段階の土取り穴の調査では瓦器、ないしは瓦質播鉢の良好な資料を得ることができた。このことは、そうした中世大和における在地系土器の製作地のひとつがこの周辺（西ノ京丘陵周辺）に存在することを示す考古学的なデータとして、きわめて貴重な意義を持つものである。従前においては土取り穴を「攪乱」として認知し、それを遺構として発掘調査した例はほとんどなかったが、今後はそれを正しく「遺構」と認定すると共に、調査担当者はそこから豊富な情報を得よう努めるべきであろう。平城京跡においても、「古代」のみが遺跡では決してないのである。

#### 〈注〉

- (1) 永島福太郎「赤膚焼の源流」（『赤膚焼』大和文化財保存会 1991）
- (2) 近江俊秀「大和における中世後期の在地系土器」（『北野願越遺跡』奈良県文化財調査報告第63集 奈良県立橿原考古学研究所 1992）
- (3) 近江俊秀「大和型瓦器碗の編年と実年代の再検討」（『古代文化』43-10 1992）
- (4) 『古代の土器1 都城の土器集成』古代の土器研究会 1992
- (5) 『平城京右京8条1坊13・14坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所 1989

## 图 版



1 調査地全景（西より）



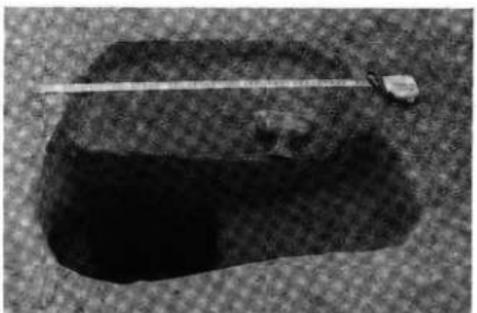
2 同上（東より）



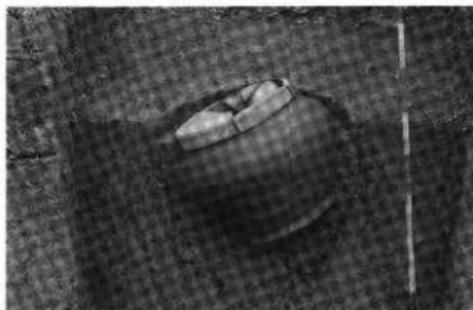
1 調査風景



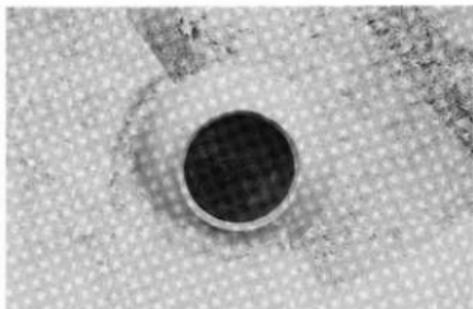
2 SK-35遺物出土状況（北より）



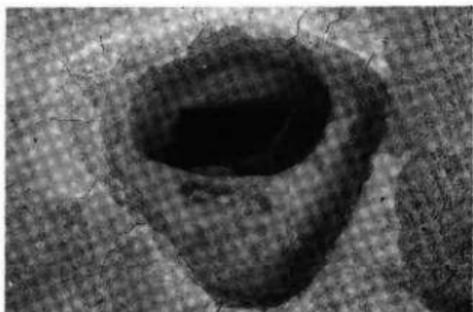
3 SK-21半掘状況（北より）



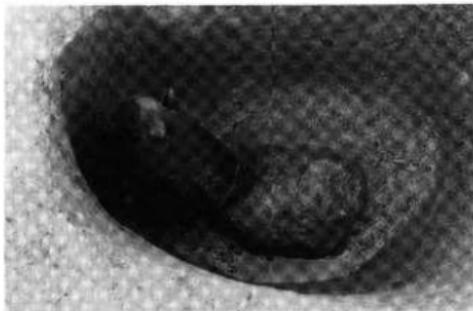
1 陶衣壺(SK-39)出土状況(北より)



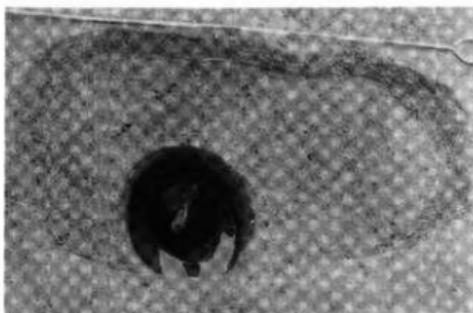
2 同上(内部)



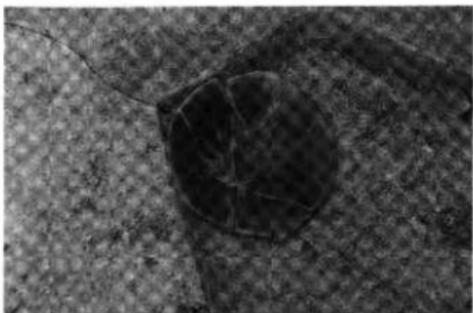
3 P-02柱根石検出状況(西より)



1 P-03柱根および根石検出状況(西より)



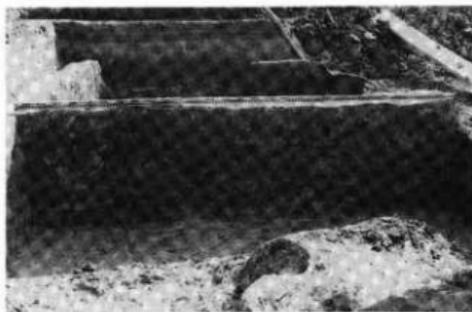
2 P-04柱根検出状況(東より)



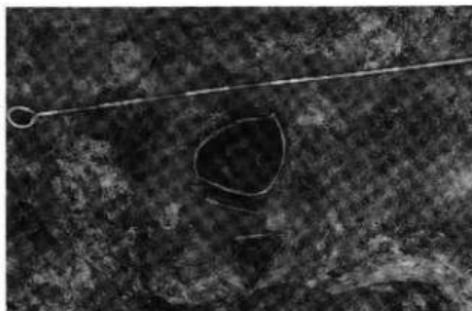
3 SK-06瓦質欄鉢出土状況(南より)



1 SK-05完掘状況（東より）



2 SX-01土層堆積状況（西より）



3 同上（瓦質補鉢出土状況）



1



2



3



4



5



6

1 ~ 5 = SK-35

6 = SK-36



9

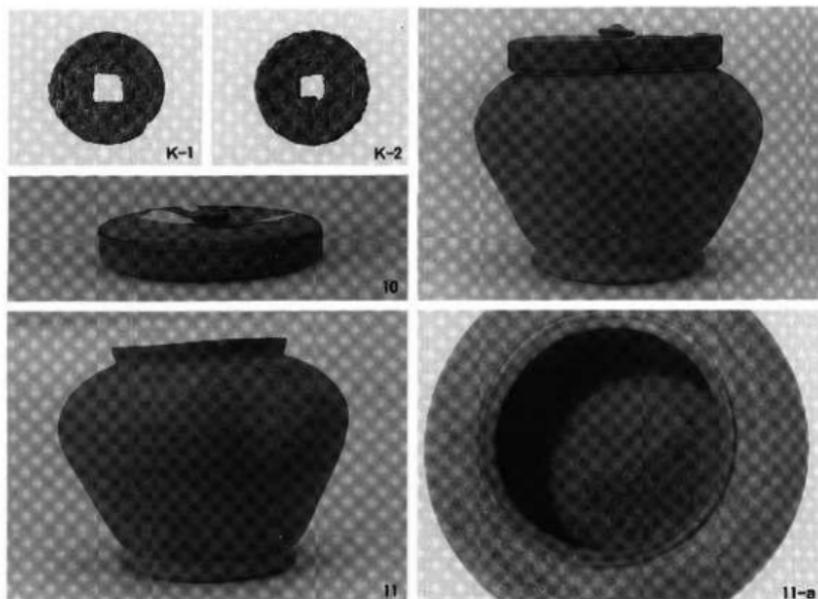


8

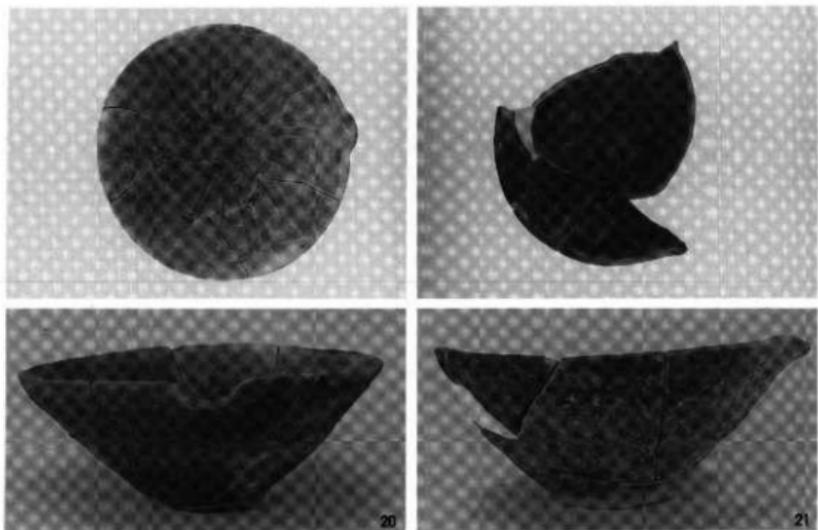


7

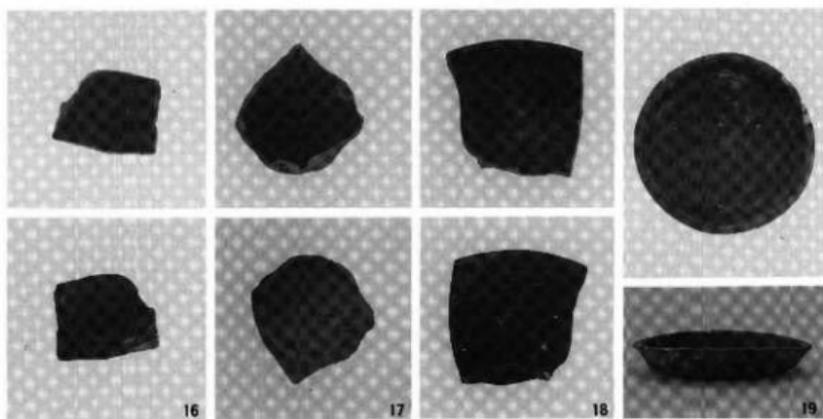
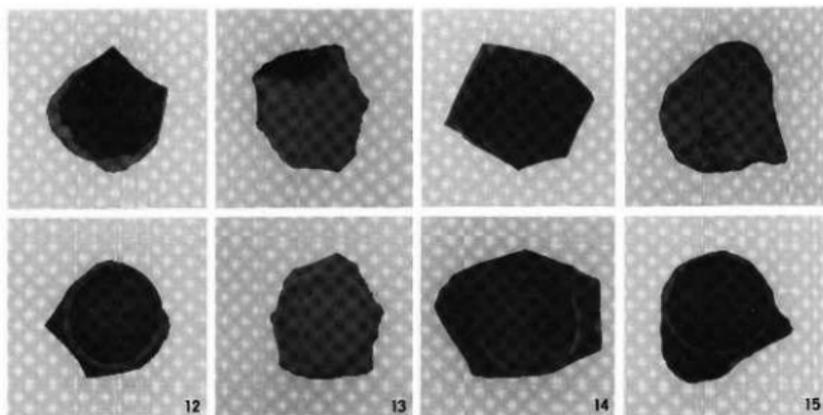
7.8 = 包含層 9 = SK-21



10, 11=SK-39



20=SK-06 21=SX-01



大和郡山市文化財調査概要 28

平城京右京8条3坊3坪発掘調査概報

平成5年3月31日

発行 大和郡山市教育委員会  
大和郡山市北郡山町248-4  
印刷 共同精版印刷株式会社  
奈良市三条大路2丁目2番6号